

# 江戸の坂道散策

## 浄瑠璃坂 (新宿区)



1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役。『タモリのTOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞社）がある。

### 山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

文 京区の小石川五丁目と大塚三丁目の境を、大きく湾曲しながら北東に下る美しい坂がある。名坂の名に恥じない「湯立坂」である。湯立とは神事の一つで、神前で湯を沸かし、巫女や神官などがその熱湯に笹の葉を浸して自分の身や参詣人にふりかけるもの。元は禊の一種だったが、今は無病息災を祈る行事である。

ここでいう「神前」とは、今も湯立坂下から北に上った氷川台に鎮座している鏡川神社（旧氷川神社）をいう。かつて、坂下と神社との間には小石川が流れていて、人々が容易に渡れなかったため、この坂側で湯立神事を行ったのが坂名の由来だ。小石川は昭和九（一九三四）年に暗渠となつて、今は千川通りと称されているが、江戸時代にはここまで小船が上ってきていた。湯立坂を下って再び上る坂を「網干坂」と呼ぶのは、漁師がこの坂に網を干していたことに起因する。

坂を下る途中、右側（東）には山林王だった磯野敬氏の旧邸・銅御殿があり、その正門と古木群が坂に一層の風格を添えている。



占春園には、碑文を刻んだ鉄平石が今も残されている。

左側（西）の「教育の森公園」は旧東京教育大学（筑波大学の前身）の跡地だが、江戸時代、ここに陸奥守山藩松平家（二万石）の上・中屋敷が置かれていた。守山藩は水戸藩の支藩だが、三代藩主・頼寛のとき、邸内に「占春園」という名園が造られた。延享三（一七四六）年に建立された碑文には、杜鵑の名所だったこの庭園の優雅さが記されている。今もその風情を色濃く残す園内を歩くと、江戸の風が吹いてくる。

### 茶屋 一眼

千代田区の九段南と五番町の境に「帯坂」という粋な名前の坂がある。しかし、実は悲しい伝説に基づいた坂なのだ。

ここは怪談『番町皿屋敷』の舞台の一つ。話の展開は幾通りもあるが、旗本・青山播磨の腰元のお菊が、播磨のところから逃れるため髪をふり乱し、帯を引きずってこの坂を下ったという話になっている。江戸庶民は伝説をふくらませて、坂名にも登場させたのだ。

湯立坂アクセス ▶ 丸ノ内線・茗荷谷駅を出て、すぐ前の春日通りを横断して左折。1本目（交番）を右折すると坂上へ。徒歩3分。